
ロリコン・コンプレックス！

佐藤みりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロリコン・コンプレックス！

【Zコード】

Z6010Z

【作者名】

佐藤みりん

【あらすじ】

小学生みたいな身長体型がコンプレックスの女子高校生、佐々木ゆみ。そんな彼女には好きな人がいる。

けれども、その恋の道は険しかった。何せ片恋の相手は学校中で噂になるほどの人物なのだ。学校一のイケ面で、定期テストの上位常連、その癖スポーツ万能、そして……真正のロリコン、だからだ。

「わたしの好きな人は、ロリコンです」 これはそんな一行目から始まって、迫りくる障害なんて跳ね飛ばし、立ちふさがる常識の壁を突き破る、恋に生き愛へとひた進む女の子の、ピュア・ラ

ブストーリー。

わたしの好きな人は、ロリコンです。

ある日、わたしは言いました。

「先輩、わたしの胸はぺったんこです」

わたしは胸に手を当て、ずんと先輩の田の前に立ちふさがりました。

わたしのいまいる場所は先輩の部屋です。椅子に座つて何やら本を読んでいた先輩は、田の前に屹立するわたしに一瞬だけ田線を上げ、そしてすぐに戻しました。

「そうだね。ぺったんこだね。ちなみに君は、ぺったんこの語源は知っているかな」

「無論です」

落ち着きをはらつて言葉を返す先輩は、わたしの逆セクハラ発言に対してもあわてていません。あつさりと肯定してみせたどころか、さりげなく話題を変えようとしています。

わたしからのセクハラに慣れたのでしょうか。ちなみにぺったんこの語源は諸説ありますが、もちつきの際にぺったんぺったんと音

が鳴ることからとこつ話を聞いたことがあります。眞偽は知りません。

先輩の冷たい態度にも、わたしは搖るがすめげずに続けました。

「背だつてちつちやいですし顔だつてくりくりの童顔です。制服を着ていても中学生、私服で男子の友達と繁華街を歩いていたときは小学生と間違えられて、一緒にいたその男友達が条例違反の容疑で補導されたこともあります」

「それはその人も災難だつたね……というか、自分で言つていて悲しくならないかな」

「そうですね。昔は確かに鏡を見るたびに落ち込みましたし着る服が限られて泣きたくなりました。中学一年生の折に勇気を出して梓ちゃんと初めてブラを買いに行つた時、一緒に行つた彼女がAだのBだの店員さんと相談しているのに、わたしといえ巴サイズを計つた時にまるでちよつと背伸びをした小学四年生を見るかのような微妙な笑顔で『お客様……まだご必要ではないのでは?』といわれて、それでもスポーツブラとか子供用のじゃないちゃんとしたブラが欲しかつたので喰い下がつてその結果『申し訳ありません。当店にはA AやA A Aの在庫はございません』と謝られたというトラウマはいまだも忘れられませんが、それでもいまは悲しくなんてありません! 生まれ変わつたんです! むしろ先輩の一ีズにこたえられることを喜ばしく思つてます! ほら先輩! ちつちやくまな板で小学生ばりの童顔! ムラムラしませんか?』

わたしは顔を喜色に染めてずいと顔を近づけます。その距離、五センチ。高鳴る心音は伝えられなくとも、わたしのあらぶる吐息が先輩に伝わる距離です。

先輩は非常に嫌そうな表情で顔をそむけました。

「しないよ。君は僕の好みではないからね」

淡々とした答え。わたしはそれに、むむむと眉を寄せました。

「こんなにかわいい女の子が迫っているというのに、なんて気のない反応でしょうか。それとも先輩の読んでいる本は、鼻先に迫っている女の子よりも心ひかれるものなのでしょうか。

二次元ですらない文字の集合体」ときに敗北するなど、わたしの女としてのプライドが許せません。ちらりと本の表紙に目をやります。

先輩の読んでいる本のタイトルは『幼女甲冑の薦め』というものでした。

「…………」

「幼女甲冑って、なんでしょうか？ なにやらものすごくハイレベルな匂いがしますけど……。お客様の中にご存知の方、いらっしゃいますか？ いらっしゃいましたら、『起立お願いします。その後、条例違反で警察に自首してくださいませー、とか一瞬そのカオスさにキヤビンアテンダント』っこをしかけましたが、踏みどまります。くじけません。わたしの恋はこんなことで折れるわけにはいかないのです！」

こうなれば、実力行使しかありません。

わたしは先ほど意図して近付いた先輩の顔を見ました。理知的で整った顔。ニキビのひとつもないすべすべの頬。凜々しくも涼やかなその表情。そしてメガネ！ クールな美男子がそこにいます。

よし、と決めました。

キスをしてしまおう。

本にできなくてわたしにできることは多々ありますが、その筆頭たるものが肉体的接触口ミニニケーションであることは疑いの余地もありません。まして、いまここは先輩の家で先輩の部屋の中です。そして先輩の部屋にいるのは、わたしと先輩だけです。よつするに、

密室で男女がふたりきりなのです。

これはやつてしまつても問題ないでしょ。

いえ、むしろやつてしまえという天啓ではないのでしょうか。そ
う、AをきっかけにBに移行しまで「一」という神のお告げに違
いありません！

先輩の隙をついて…… いまだ！

「何やつてんのよ、ゆみ！」

と思ったその時、ぱんっと音を立てて扉が開きました。

「あれ、梓ちゃん
やつと来たか梓」

わたしと先輩の声がぴったり重なりました。

バッドタイミングでわたしの名前を呼んで部屋に飛び込んできた
のは、中学生からの友達であり先輩の妹である梓ちゃんです。

実はもともと今日は彼女の部屋にお呼ばれしていたのです。わた
しが先輩の部屋にいるのは残念ながら両者の同意のもとではなく、
梓ちゃんがお手洗いに行っている間に彼女の部屋を抜け出し、勝手
に先輩の部屋に入りこんだからにすぎません。

梓ちゃんはわたしの正反対にあるといつてもよい見事なプロモー
ションをしている、大人びた美人さんです。冬休みを終えれば高校
一年になる彼女ですが、それを知らない人が見れば実際年齢より二
つ三つ上の女子大生に見えるでしょう。

梓ちゃんは背筋をピンと伸ばして声を張り上げました。

「早くその変態から離れなさい。襲われるわよー。」

「そんなつ、梓ちゃん！ わたしと先輩を引き離さないでください
！」

「おこおこ様。仮にも友達を変態だなんてひどいんじゃないかい？」

その言葉に、梓ちゃんの眉がぴくっと反応しました。

「……はあ？」

憎しみを舌にのせ、なに言つてのこいつ、といわんばかりに顔をしかめます。梓ちゃんの動きに合わせて、腰まで伸びた黒髪がさらりと流れました。

「あのねえ……」

そうして梓ちゃんがゆっくつ視線を合わせたのは、先輩の方でした。

「アホなの、兄貴？」

梓ちゃんの視線たるや、真冬のシンボラ平原のよつに冷やかでした。田元がちよつときつめだといつこともあって、蔑視といつ言葉を見事に体現する様がとつても似合つています。

「いまのは兄貴に言つたのよ、この変態クソロリコンがっ。ほり、離れなさい、ゆみ。あんた幼児体型だから兄貴の趣味にヒットしかねないのよ。危ないわよ。いっつおいで」

「うにゃんっ」

顔近づけすぎ、と言いながら梓ちゃんがわたしの襟を掴んでひつぱりました。梓ちゃんは「月曜にはあのクソロリコン兄貴を包装用の新聞紙で梱包して焼却処分してやりたい」と暴言を吐くほどの大先

輩嫌いなのです。

「梓ちゃん、離してください！」

「だからダメ。そいつが五歳以上十三歳未満にしか興味がない口り
コンの変態クズ野郎でもダメ。あんまり無防備すぎるのはよくない
わ。そのうち襲われるわよ」

「先輩ならいいですっ。望むどこりです！　わたしは先輩に襲われ
たいんです！　いえ！　むしろー　わたしが先輩を襲ってるんです
！」

「落ちつけちびっ！」

じたばたと抵抗するわたしの頭に、びすつと梓ちゃんのチヨップ
が振り下ろされました。

その1 らぶらぶ（後書き）

こんにちわ。あのタイトルとあらすじでいつたい何名の紳士な方が釣られたか、あのタイトルとあらすじで、本命の淑女の方は見に来てくれるのか、なんだかちょっとびりわくわくしている作者です。あ、一応は断らせていただきますが、あらすじの八割は冗談でできています。

この物語は、大体を書き終えてからの連載となっています。一話を場面ごとに投稿する形になるので、分量は一話につき千文字から五千文字ほど。平均で一日に一回のペースで投稿していく予定です。

一話目、くすりとでも笑いを誘えましたでしょうか。不安に思いつつも、主人公のゆみに付き合つていただける懐の広い方がいらっしゃることを切に祈りまして。

その2 がやがや（前書き）

前話から時系列があのつと飛びます。

その2 がやがや

春うらら。

小学生の高学年になる辺りから身体的な成長が止まり、中学生よりもちつちやい言われ続けたわたしもいよいよ高校一年生になりました。相変わらずちつちやい言われているのは変わりませんが、一年生です。一年生の時ほどの新鮮さと始まりの予感はありませんが、それでもちよつと胸がドキドキします。

時計を見ると、八時になる少し前です。ぼつぼつ人も集まってきた。新しいクラスメイトは、全然知らない人もいれば何となく見覚えのある人もいます。運が悪いのでしょうか、親しい友人はいるところゼロ。さびしいことです。

わたしは何の気なしに校庭を眺めました。桜の花は大部分が散ってしまった。そろそろ葉桜に移ろつかとしています。
そんな春ですが、残念ながら、わたしの恋の桜はまだ咲いていません。

先輩に恋して以来のアタックに次ぐアタック。猛アタックに猛アタック。わたし史上でここまで積極的になつたことはないというくらいの突進アタックを続けたといいますのに、先輩は毛の先ほども私に興味を示してくれませんでした。

理由ははつきりとわかっています。

先輩がロリコンだからです。ロリータ・コンプレックスだからです。合法などには見向きもせず、同年代などもつてのほか、五歳以上十三歳未満にしか反応しない、真なるロリコンだからです。

……そういえば、コンプレックスって劣等感という意味ですよね……。しかしコンプレックスと言われて思い浮かぶ単語は、システム、ブラコン、ロリコンなどなど犯罪臭しかしないものばかりです。なぜ昨今では変態の代名詞みたいな言葉として普及しているのでし

ようか。

「おはよ、ゆみ」

思い悩んでいますと、声をかけられました。梓ちゃんです。振り返ればそこには、あいかわらず高校生とも思えない大人びた美人さんがいました。

「おはよ、梓ちゃん」

わたしもぴよこんと頭を下げます。喜ばしいことに、今年も梓ちゃんと同じクラスなのです。

「今日はいい天気ね。兄貴みたいな変態は、この日の光を浴びたら消え去ってしまううんくらいの陽気」

「先輩はゾンビか吸血鬼ですか……？」

今日の天気にさりげなく自分の願望を混ぜる梓ちゃんに答えて、ふと思いつきました。そうです。わからないことがあつたら、梓ちゃんに聞けばよいのです。

「梓ちゃん。コンプレックスってどういう意味か知っていますか？」
「コンプレックス？ またややこしいこと聞いてきたわね……直訳すると『複合』とか『複雑』よ」

ややこしいと言つても、もじて考えずにあつさつ答えてくれました。梓ちゃん、頭も非常に良いのです。梓ちゃんは決して認めませんが、博覧強記の先輩の影響でしょう。

「複雑……？ はじめて聞きましたけど」

「まあ、そつちはあんまりなじみないわよね。日本語的な用法で『劣等感』って使われているのは、微妙に誤用なのよ。まあ、厳密には誤用とも言いづらいけど……。ちなみにコンプレックスはフェティシズム、俗にいうFHチとほぼ同義に使われることもあるから、ファザコンとか시스コンとかいう使われ方もするの」

わかりやすくするためにだいぶ省略したから詳しきは自分で調べて、と言つて話を切り上げました。

「うん、勉強になりました。あまり簡単に人に聞きだすクセをつけるものではないでしょ。知りたいことを自分で調べるとこ」「これは、自己を独立させる第一歩でもあります。

そうして梓ちゃんをおしゃべりをしていきますと

「やつほつ、藤堂梓と佐々木ゆみ！ 今年も同じクラスか！ 嬉しいよ！」

「なんだなんだー。まだホームルームもやってないのに授業してるのがー」

声をかけてきたのは去年も同じクラスだった二人です。成績はもといその行動がおバカで有名なコンビです。最初に声をかけてきた元気のいいショートカットの方が黒衣莉由、間延びした口調のふわふわ髪のほうが白木岸祢。通称、白黒コンビで先生からも二人セットで目をつけられています。

「おはよおひじやこます、おふたりとも」

このふたりも一緒にクラスなんですね。残念です。梓ちゃんもわたしと同意見なようで、ふたりを見るや田を剣呑に尖らせました。

「何よ、あんたら同じクラスじゃないでしょ。ていうか階が違うわよ。一階じゃなくて、一階でしょ」

ちなみにうちの学校は、一階が一年生、二階が一年生、三階が二年生といつ具合に教室が区切られています。

「ちょっと待て！ 留年なんてしてないぞ。あっちだけならともかく、あたしは違う！」

「おじー。うちばばかじやないぞー。あっちだけなら、まず間違いなくそうだけどなー」

邪険にあしらひ梓ちゃんに、おバカのふたりは互いを指差しました。

ふむ、つまりは

「なるほど。要するに二人とも留年なんですね。どうぞ仲良へ一階へ」「ーしてくださー」

「なにー！」

「むづー」

親指を下に向けてみせると、ぱちり、と二人の視線が力合います。

「お前が馬鹿なせいで！」
「アホがいるからだー」

そのまま見ていますと、どちらが眞のバカかの論争が始まっています。おバカのふたりはあいかわらず仲が良いようですが、梓ちゃんがため息をつきました。

「新学年になつたつて、いつのにやかましいわね、バカどもは」「でも梓ちゃんは物知りで教え方も幅広いので、よい教師になれると思いますよ。ほひ。古典の山川先生とかよりはずつと」

あの白黒コンビが進級できたのは、間違いなくテスト前に開いていた梓ちゃんの勉強会のおかげです。

「ゆみも戻らませない」

「あつ」

「うつんといづかれました。意外とわっしょい攻撃に弱い梓ちゃんは照れていぬらじく、ちょっと頬を紅潮させていました。

「それより放課後の同好会、行く?」

「無論です」

わたしは力強く頷きました。

同好会というのは、わたしと梓ちゃんと先輩の三人で形成されているものです。といつことは、先輩と確実に出来えるチャンスです。先輩と同じ部屋にいられるのです。先輩と同じ空気が吸えるのです。

「地球が割れても行きますともー」

それで行かないわけがありません。わたしは先輩を愛しているのです。

「あつや」

鼻息を荒くするわたしの頭に、梓ちゃんはぽんと頭に手を置きました。

「ま、とりあえずホームルームと始業式が先ね」

やれやれとため息をついて、梓ちゃんが自分の席に向かいます。おバカの二人の論争の決着を待たず、キーンローンカーンローンとチャイムが鳴り、同時に先生が入ってきました。

「おーい、そこの白黒二人は新学期初日から何やつてるんだ。始業式前から早々に生徒指導室に行きたいのかお前らは」

去年の生徒指導を担当していた体育教師が、今年は担任のようです。そのお言葉に、ふたりはびっくりと身を震わせて大人しくなりました。

今日は平和な日になりそうです。

その3 めりめり

わたしと梓ちゃんはとことこ廊下を歩いていました。

「終わりましたね」
「終わったわねー」

梓ちゃんがぐぐっと背伸びをしました。

今日は始業式とホームルームだけなので、早く終わっています。クラスは梓ちゃんとおバカのふたりを筆頭に、女子の知り合いが結構いたのですぐになじめるでしょう。ちなみに始業式を妨害したおバカの二人は生活指導室行きです。

男子は見知ったのが何人か、それにひとりだけ去年仲良かつたのがいましたが……うん、あれは見なかつたことにしましょう。

「バカふたりはあいかわらずバカだつたわね」

「変わらないので、安心できますけどね。あのふたりを見てるとなごみますよ」

「そう? しつかし学校側もよくあの二人を同じクラスにしたわよね。始業式そようやらかしてんしさあ」

「問題児をまとめて見はりやすくしたんじやないですか? 生徒指導の中村が担任になつたのつて、どう考へてもあのふたりのせいですしき」

「いや、それでも普通別々に分けるつて」

おバカのふたりをネタにほのぼのと会話を交わします。

いまはまだ昼前。時計をみると十一時を少しまわったところでした。

始業式はぴかぴかの一年生を見た以外、校長の話も退屈で特に印象もなく終りました。

「「」の後は同好会ね

「そうですね

地域福祉同好会。

それがわたしと梓ちゃんが所属しており、また去年先輩が入学早くに立ち上げた同好会の名前です。

その活動内容は、地元のボランティアに参加しまくるという同好会です。遊びたい盛りの高校生ではいつさいの魅力を感じられないこと間違いなしの、存在理由を疑つてしまつのような活動内容でしょう。

同好会の強いて得になる点を上げるならば、内申が良くなるぐらいでしょうか。奉仕活動が好きで好きでたまらないという変わった嗜好の持ち主でもない限りは、活動に惹かれて入りたいとは思うようなどこではありません。まあ、わたしからすれば、先輩がいるというその一点で全ての悪条件は払拭されます。

ちなみに去年の冬までには同好会員は先輩と梓ちゃんの藤堂兄妹ふたりでした。一年の冬休み明けにわたしが加入し、現在では三名になっています。

規模的に見れば非常にちっぽけな団体です。あくまで同好会であり部活ですらないのになぜ部屋が与えられたかといえば、非常に学校に都合がよいからでしょう。去年の半年ほどを真面目に活動してから、部室が与えられたらしいです。

わたしたち地域福祉同好会は確かに学校の評判にプラスになる要素しかない同好会です。その上、わたし達は非常に真面目に活動しています。傍から見れば健全この上ない同好会でしょう。

ただ、先生方は気がついていないのでしき。

先輩が獲つてくる仕事は、主にというか全て児童福祉のボランティ

「アだとこり」と。

「今日は同好会は会議の日でしたっけ」

同好会の活動は基本、ふたつに分かれています。ひとつはボランティア活動そのもの。そしてもうひとつは、数あるボランティア活動の中で何をするか選別して決めるための会議です。

「やうよ」

梓ちゃんは田をやらいと怒りさせて領きました。

あいかわらずヤル気が満ち満ちています。もはや殺氣と間違えかねないほどの気を放出しているのは、梓ちゃんが同好会に入ったエンソードに起因するものです。

「相変わらずヤル気に満ちてるというか殺る気に満ちてこるというべきか……まあ、梓ちゃんの目的はそっちですからね」

去年入学したばかりの時分です。児童福祉ばかりやつていうという同好会の内容を知った梓ちゃんが怒り狂い「あの兄貴が犯罪行為に走らないように見張ってくれるわ！」と叫び入部したという逸話があるのです。おバカのふたりに聞いたことですが、多分事実でしょう。

よつて会議の日、同好会の討論は非常に白熱します。

「絶対、変態兄貴には負けないわよお……！ あのロココノンに児童福祉になんて、やりしてたまるもんですか！」

梓ちゃんが、ぐぐつと拳を固めました。気の入れようが半端ではありません。今日も藤堂兄妹の論争が繰り広げられることがでしょう。

ふたりの論争は見ているだけで面白いものがありますから、構わないのですが。

過剰なまでに気合を入れる梓ちゃんの肩に、ぽんと手を置きました。

「まあ、でもお腹を食べましょ。まだ時間がありますし、学食でおしゃべりして時間を潰しましょ。」

同好会活動は、一時からです。

「そうね。あの口っこssonを呑きつぶすために、しっかり食べないとね」

梓ちゃんが、不敵ながらも怪しい笑顔を浮かべていました。

先輩は、ロリコンです。

わたしは先輩のことが大好きですが、先輩はそれと同じくらい幼女を愛しています。先輩がロリコンなのではなく、ロリコンという存在の全般が先輩なのではと思つてしまつほどその愛は無限大であり、彼方に広がる大宇宙と先輩のロリコンを、そのどちらが広大かと問われたら、わたしは答えることができないでしょう。

では先輩がどれほど幼女を好きか、ついでにわたしがどれくらい先輩のことが好きかを端的に表せるHピソードがあります。少し昔、というか始業式の数日前のことです。

ある日、先輩はこう言いました。

「ペットボトルには一種類ある。ただのペットボトルと輝くペットボトルだ」

「輝くペットボトル？」

それは休日のことです。いつものように道行く幼女を眺めて愛でるために外出した先輩を、これまたいつものようにわたしがストーキングしていました。三百六十度どこを見渡してもおかしなことなど一点も見当たらない、いつも通りの休日の日常です。

「なんですか、輝くペットボトルって？」

ただ先輩の外出はなぜか追跡者を振り切らうとするかのようにあちこち場所を移動するために、同行する方としては少々疲れます。先輩が自動販売機で飲み物を買って足を休めたのを合図に、わたし達は休憩をしていました。

「そうだね。例えばこれはただのペットボトルだろ?」

わたしの疑問符に先輩は自分が飲んでいたペットボトルを軽く持ち上げました。すでに飲み終わつたようで、その中身は空になつています。

「はい、まあそうですね」

「飲み物が入つていないペットボトルには、普通何の価値もない。けれど十三歳未満の女の子が飲み終わつたものは輝くペットボトルとなる。僕の目には、その差の見分けがつくんだよ。十三歳以上の人間が飲んだペットボトルはただのペットボトルでしかないが、五歳以上十三歳未満の女の子が飲んだペットボトルはまばゆいばかりの光を放つてゐるんだ」

どうやら先輩に備わつてゐる幼女感知機能は、人間の域を越えつつあるようです。

さすがに啞然としていますと、先輩は飲み終わつたペットボトルを自動販売機の脇においてあるゴミ箱に入れました。

「このゴミ箱にはないね。あればそれを収集して水筒代わり使うんだが……残念だ」

「では先輩。これを進呈します。輝いてますか?」

「いやいやいや。ただのペットボトルなんて、ゴミでしかない」

わたしが自分の飲み終わつたペットボトルを見せると、先輩は首を横にふりました。

なんとも素つ気ない反応です。思春期の男であるならば、女の子が口をつけたペットボトルを前にすれば「間接キス!?」と胸をどぎまきさせるのが一般的な反応ではないのでしょうか。

わたしは「むひつ」と唸ります。

「先輩は五歳以上十三歳未満の女の子にしか興味がないそうですが、そもそもそれは何故ですか？ 十歳を過ぎれば、わたしより発育のよい女の子はちらほらでてきます。幼いからといって純真であるといつことが幻想なのを承知してないわけでもないでしょう。五歳以上十三歳未満にあって、わたしにないものとはなんですか？」

「君が六歳でも十歳もなく、いま十六歳であることだよ。そんなことよりもういい加減、付きまとつのはやめてくれ。さすがに僕も疲れるよ」

そう言つて先輩は再び歩き始めました。

先輩の言葉はとても納得のできるものではありません。そもそも理由になつていません。いつもならば先輩の言葉など無視してとことんつきまとうわたしですが、その時はその場で数秒思案しました。

「…………」

わたしの視線の先には、先輩がペットボトルを捨てたゴミ箱がありました。

キーンゴーンカーンゴーンと、この学校の誰よりも時間に忠実なチャイムが鳴ります。いつもなら昼休みの始まりを知らせる鐘にとたん学校中が騒がしくなりますが、入学式があつた今日は午前で終わりのため大半の生徒は帰宅していますから、静かなものです。

「いただきま
す」

わたしと梓ちゃんは声を合わせて食事を始めました。学食で、わたしはランチを。梓ちゃんは、カツ丼を。
……女の子が、かつ丼つて、梓ちゃん。

「梓ちゃん、それゲン担ぎですか？」

箸で示してみると、梓ちゃんは何のためらいもなく領きました。

「そうよ」
「またよくわからなこと……」
「負けられないのよ。変態」とさして、負けるわけにはいかないのよ
」

そうして他愛もない会話をしながらむしゃむしゃ食していますと

「せういえばゆみ。あんたもしかして、お金がないの？」

ふと梓ちゃんが心配そうに聞いてきました。いきなりなんでしょう

うか。会話の脈絡なくやつ聞かれたので、わたしは首を傾げました。

「いえ？ 潤沢ではないですけど、困つていのほどでもありますん

よつあることつも通つです。

「でもあんた最近そのペットボトルに飲み物入れてくつになつたじやない。飲み物を貰つお金もなくなつたんじやないの？」

梓ちゃんが机に置いたペットボトルを指差して言つます。

「ああ」

その指摘で命題がいきました。確かに数日前から、同好会活動中でもわたしはこの使用済みのペットボトルを使つていました。

「どうしたの？ なんかあつたなら、相談してよ

梓ちゃんの目はちよつと不安そつで、わたしが窮状にいるんじやなかと心の底から気遣つてくれてこました。

どうやらこらぬ心配をかけてしまつたようです。これは早く誤解を解かねばと箸を止めてペットボトルを持ち上げました。

「これは輝くペットボトルです」
「輝くペットボトル？」

怪訝な様子の梓ちゃんにわたしは力強く頷きました。

「はい。これは梓ちゃんのお兄さんである先輩が口を付けて飲んだ

ペットボ

「

「飛んでけ彼方に！」

「ああ、なにを！」

今まで言わざる梓ちゃんがわたしの手からペットボトルをもぎ取つてベキメシャと音を立てて握りつぶし窓の外に力一杯放り投げました。野球部もびっくりの遠投であり、握力です。

わたしはあわてて窓枠に手を付いて迫りますが……残念なことに、最近わたしに備わった先輩感知機能を持つてしまも、輝くペットボトルのきらめきがどこに飛ばされたのか分かりません。

わたしは涙目になつて振り返りました。

「梓ちゃん、窓から物を投げたらいけません！」

「何を常識ふつてんのよ！ アホなのあんたは！ 兄貴の使ってたペットボトルだ？ どこから手に入れたか知らないけど、おぞましいわよつ。わすがにドン引きよ！」

「え……だつてちゃんと洗いましたよ？ 本当は洗わずに使いたかったんですけど、『ミミ箱から取り出したものですし衛生上良くないな』といふことで。それに何日も洗わずにいると飲み口から雑菌が繁殖しますからね」

「『ミミ箱から』……？」

梓ちゃんの顔がひきつりました。その田は思考回路からして理解できない異星人の文化風習を見る目でした。

「ほえ？」

なにかまることをしましたでしょ？ わたしは、ぱちくり瞬きをひとつ。

「だつて、先輩もやつているんですよ？」

「あのバカ兄貴殺す！」

「え、ちょ、梓ちゃん！？」

わたしが制止をする間もありません。
氣炎轟々、口から火を噴きかねない勢いで梓ちゃんは学食を飛び
ました。

その6 まひば

学食を飛び出た梓ちゃんを追いかけましたが、体格差からも分かるように、わたしと梓ちゃんでは身体能力に差があります。おバカのふたりとすれ違つてすぐにその背中は見えなくなつてしましました。

それでも出来るショートカットの限りをつくし、肩で息をしながら同好会の部室に飛び込みましたが

「……」
「……」

時すでに遅し。

容姿端麗な藤堂兄妹ふたりが互いに険悪な空気を出していました。そっぽを向きあつてているというのに、真正面から睨みあつてているかのようにバチバチと火花を散らし合つといつ器用なことをしています。

ちなみに先輩の顔は平手ではたかれた後のような紅葉模様の赤い痕と拳骨で殴られたような青タンと猫にでもひつかれたような五本線が引かれています。

あちやあ、と顔を掌で覆いました。

普段の先輩は温厚です。といふか、幼女に關すること以外ではまったく興味を示さず感情的にならずクールな人柄です。元から仲の悪いふたりではあります、それは梓ちゃんが一方的に先輩を毛嫌いしているからです。見たところ、先輩は梓ちゃんに対し悪感情を抱いていません。常ならば梓ちゃんに嫌悪の感情をぶつけられても涼しい顔で受け流しています。

ですが、人には限度というものがあります。意味も分からずはた

かれ殴られひつかかられれば、そりゃ誰だつて不機嫌になるでしょう。

「はあ

わたしはため息をついて梓ちゃんの隣に腰掛けました。先輩の隣に座りたいのは山々ですが、『機嫌斜めの先輩と梓ちゃんの神経をさらに逆なでしても仕方ないでしょう。そこはわきまえます。

しかし、このままでは会議もできません。梓ちゃんの暴力を止められなかつた責任もありますし、とりあえず仲裁のため、先輩ラブのスイッチをいつたん切りました。

「……梓ちゃん」

「私は悪くないわよ

そう吐き捨てた後、そっぽを向いて田も合わせません。意思疎通の拒絶を全身で訴えていきます。

「……もひつ」

これは手のつけようがありません。

梓ちゃんも自分がまったく悪くないと思つてゐるわけではないでしょう。ただ先輩に対してもだけは意地をつき通していきます。兄を相手に謝るなんて、梓ちゃんからすれば沽券に関わることなのでしょう。

わたしはもうひとりのまつを見ました。

「……先輩」

「僕が何をしたというんだい？」

さすがの先輩もぶすつとしています。

これまたもつともです。もつともすきて説得の余地がありません。ふむ、と考え込みます。どうしましょう。どうやつてこの場を治めましょうか。

いつそのこと何もしないで終了と/or考えなくはないのですが、来月分のボランティアの予定を決めるまでにあまり時間がありません。この時期ですと新入生勧誘についても話し合わなければいけませんし、進めないことにはこの先困ったことになります。

わたしは心中で唸りながらもふたりを見比べました。

大人っぽく美麗な見た目が良く似ていて、並べば一目で兄妹とわかります。それとこれを言つたら梓ちゃんが本気でぶち切れるので口には決して出しませんが、この兄妹、性格も根っこは似通つているのです。

「……梓ちゃん。話し合いをしまじょつよ。まひ、二人で」

無視されました。

「梓ちゃん。そう意地にならないでください」

無視されました。

「……梓ちゃん?」

無視されました。

「…………はあ」

いい加減面倒になりました。

ていうかそういう態度ならばわたしにだつて考えがあります。

わたしは席を立つて、先輩の隣まで移動しました。

「……ツ」

梓ちゃんの眉がぴくぴくと動きました。

無視しました。

「先輩。梓ちゃんなんてほつといて話し合いましょう」

「そうだね。今日は梓に話す意志もないみたいだし」

「はい。えへへー。先輩とふたりきりで話しあえるなんて嬉しいです。至上の喜びです」

「それはいいから早く話を進めよ！」

わたしと先輩は仲良く会話をします。先輩ラブのスイッチは切つたつもりでしたが、それでも思わずほにゃらんと顔がゆるんでしまいます。

「……ツ」

梓ちゃんの眉がぴくぴくと動きました。

無視しました。

「でも『ふたりきり』だったら話しあつまでもないですね」

ふたりきり、のとこに重点的にアクセントを置きます。

「……ツー」

梓ちゃんが猛烈な勢いで睨んできました。

無視しました。

「そうだね。一ヶ月分のボランティア枠は五個しかないからね」「はい。ではわたしと先輩で持ち合つた分で、来月分のボランティア活動はけつて」「ちょっと待ちなさい！」

とうとう立ち上がり叫びました。頭がいいのに刺激に対する反応が単純なところは、梓ちゃんのかわいいところです。

今度は無視しません。

わたしはにつこつ笑つて振り返りました。

「なんですか、梓ちゃん。文句があるならさつきり言つてください」「んなことは言われなくともわかつてゐわよー。ゆみのはいいけど、兄貴の持つてきたようないかがわしい活動は絶対認めないからねー！」

びしつと先輩を指差して、雄々しく言つ放ちます。

「いががわしいとはなんだ。真つ当な児童福祉じゃないか」「兄貴がいうと児童福祉がとたんいかがわしくなるのよ！」「それは言ひがかりだろう。少なくとも活動中僕が何か文句を言われたことはないぞ。むしろ感謝されたことしかない」「だまんなさいよ変態口リコンー！」

「まあ、ふたりとも座つてくださいな」

また手が出たら、仲裁が面倒になります。わたしは間に入つて主に梓ちゃんをなだめました。

「ほり。気が済むまで話しあいましょう」「言われるまでもないわ！」「言つことは特にないかな」

そうしてつつがなく会議が始まりました。

「ちっせじょう、兄貴め」

「まあまあ。そんなことするとスカートめくれますよ」

同好会の会議終了後の下校途中です。わたしは地面を蹴りあげる梓ちゃんをいさめました。

今日の論争の決着はつきませんでした。ボランティア活動は月に五と決めてあります。同好会員がそれぞれ三つずつボランティア活動を見つけてくるのが決まりです。

わたしが取ってきた来月分のボランティア活動は三つともさして議論をするまでもなく認可されました。

そして、残り梓の一一つ。この一つが問題です。

梓ちゃんと先輩、藤堂兄妹が持ってきたボランティアですが、全て口にちが被つていたのです。というか、先輩が獲つてくる児童福祉のボランティアを決してやらせまいと、梓ちゃんがわざと口にちを被せているのです。毎度毎度見事に口にちを被せる梓ちゃんの執念たるや恐るべし、というほかありません。その心意気を見ていると、実は梓ちゃん、先輩のことが大好きなんじゃないかと勘違いしてしまいそうになるぐらい大したものなのです。

「今日も激論でしたね」

「クソ兄貴の奴、ヘリクツが異常に上手いのよね」

悪々しげに、もしくは悔しげに言こます。

「まあ、梓ちゃんの弁舌も大したものだと思いますけど」

藤堂兄妹の口の達者さでしたら、どうぞおどけに思えます。梓ちゃんも先輩も、会議において退くということは一切しません。先輩の幼女と触れあいたいという欲求と、そんなことさせるかという梓ちゃんの思いがぶつかり合って、会議は激烈を極めるのです。そして藤堂兄妹の壮絶な論議は終わりませんでした。

「でも新入生勧誘活動は決まったので良かったです」

勧誘活動は、ビラ張り以外は一切やらないことに決定しました。
楽でいいことです。

梓ちゃんは肩をすくめて

「いろいろ部[室]があるつていいとも、うちは同好会だもの。しかも三人。正式な部活動に比べてそもそもやれることも少ないし、別に人が欲しいわけでもないしね。はっきりいえば、新入生なんて入んなくともいいのよ」

潰れても構わない、と暗に言っています。梓ちゃんが同好会に入ったそもそもその目的は先輩を見張るためですから、本心でしょう。そこらへん、あつたりしています。

実のところ、来年以降なら潰れても構わないというのは同好会員全員の共通意識でもあります。梓ちゃんは先述した通りですし、先輩も自分の欲望……もとい、幼女に対する無償のアガペーを満たすためにこの同好会を作ったので、自分が卒業した後は気にも留めないでしょ。

「そうですね」

わたしも同好会の存続に興味がないところは同じです。愛着がまったくないとはいいませんが、先輩がいなくなつたら、本気で何の

魅力もありません。面倒だという気持ちの比重のほうが大きいのが本心です。

「わたしも先輩が卒業した後、同好会をやっているかどうか疑問ですしね。新入部員なんていないほうが、いつそ後腐れなくつぶせて楽かもしませんね」

ただ後輩が入つたら、さすがにそうそう止めるわけにもいきません。ボランティアが好きという奇麗な人間がいないとも限りませんし、わたしも梓ちゃんも、そこで放り投げられるほど無責任ではないのです。

「……そういうゆみつて、そもそも兄貴のどこが好きなの？」
「え？」

同好会の未来について話そうとしたのですが、梓ちゃんはわたしの意図しなかつたところに反応しました。

「話してませんでしたっけ？」
「うん。聞いてないわ」
「そういうば、そうでしたっけ」

そういうえばそれは梓ちゃんにも打ち明けていなかつたことでした。先輩を好きな理由。それはなんていうか、わたしからしてみれば考えるまでもないことだつたからです。

でも梓ちゃんは「ロリコンは死滅しろ。消え失せろ。人類のゴミだ。火曜日には燃えろ」と口癖のように咳き先輩を毛嫌いしています。わたしのその愛が理解できないのも道理。そういう疑問が出てくるのも当然でしょう。

「だつて先輩はカッコいいですしどもいいですよ。体育の授業を見た限り、運動神経だつて大したものでした。体育館でのバスケのミニゲームで、先輩は活躍していましたよ」

「あんた、去年の三学期から授業の時になぜかいなくなることがあるけど、まさか兄貴の授業をのぞきに……？」

授業など、先輩の汗を流す姿を見る価値に比べればやせこなものです。

「見た限りし、成績良し、運動神経良し。パーフェクトではありますか」「ロマンジヤなければね」

それが全て、といふように梓ちゃんが憂い気に臉を落とします。そいつた小さな仕草も大人っぽくて様になっています。

「あんた、あの変態兄貴が身内にいる私の気持ちがわかる?」「代わつてください」

即座にわたしは切り返します。

先輩と一緒に家。なんという理想郷でしょうか。いえ、天国?はたまた桃源郷? それともそこはヴァルハラ? もう! ロマンチックが止まらないではありませんか!

「……ロマン」「おつと」

梓ちゃんの指摘に、わたしはあふれ出たよだれをじゅるりとぬぐいました。

「しかし一緒に家の……つぶふくへく、やりたい放題ですね。梓ちゃん、さつそく戸籍変更の手続きを。養子縁組を活用すれば、住む家を何か変えられるはずです」

「……そつ。じゃあこいつ考えてみなさい」

ひどく疲れた様子の梓ちゃんが、言葉を変えます。

「あなたの父親は、重度のロリコンです。世間にほのかることなく、ロリコングッズを買いやさっています。食事の時にま、幼女の話しかしません」

「そんな人、父親じゃありません。いえ人間ですらありません。そうだ異星人に違ひありません」

わたしはきつぱりと断じます。
梓ちゃんがほっと息をつきました。

「よかつた。常識はまだ残っていたのね。それと同じなのよ」

「先輩はいいんですよ。先輩のロリコンは他のロリコンとはロリコンの一線を画するロリコンでありロリコンを超えたロリコンなロリコンなのでそのロリコンはロリコンであってもロリコンとして許されるロリコンなのです」

「もうこいつはダメなのかしら……」

「……あんた、昔はもつと普通の子だったわよね？ ていつか普通に普通の子だったわよね？ ねえ、いつの間にこんな子になっちゃったのよ。昔は誰かと付き合っていても、そこまで盲目猛進じゃなか

た。

つたじやない。こつ常識を、節度を、社会のやさしいルールを忘れたの？」

「それは先輩の素晴らしいがわたしを作り替えたと言つほかないですね。恋に恋していたわたしはもういません。先輩に出会つて初めて恋をし愛するということを知つたのです。常識？　先輩に対する無限大の愛は、そんな枠に収まりきりません。節度？　愛を叶えるのに、世間体なんて気にすることがどうして必要なんですか。社会のやさしいルール？　そんなものを守つていたら、わたしはいつまでたつても先輩に夜這いをかけることができないですか！」

「一生するな」

梓ちゃんは頭痛を堪えるようにこめかみに手を当てています。

「今日久しぶりにあんたをひたすら泊める予定だつたけど……急速に不安になつてきましたわ」

「えええっ、約束は守つてくださいよ……」

「ああもうっ。守るけどさあっ。守るけどあんたも法律をきちんと守りなさいよ！？」

「え……も、もちろんですよ……」

「田を泳がすなあ……」

なぜだか知りませんが、梓ちゃんは涙田です。わたしの親友を泣かせるなんて、許せませんね。

「くつそつ、最近は偏頭痛がするよになつたわよこのバカゆみつ」「大変ですね。心身は互いに影響し合いますから気を付けてくださいね。あと好きなところと言えば、先輩のあまり人を差別しないところとか」

なぜ罵倒されていいるかいまいち理解できませんでしたが、わたし

は話を続けます。

「……あんたの目は節穴？ あれは何よりも最低な基準で女を差別しているクズ人種のひとつよ」

「またまた。妹である梓ちゃんが、先輩の素晴らしいさをわかつていなわけないでしょ。梓ちゃんのアンチ先輩は筋金入りですね。何ですか。実はブラコンだつたりしますか。シンデレの愛情の裏返し表現ですか」

わたしのからかいに烈火のごとく怒りだすかと思えば、梓ちゃんの反応は意外なものでした。

「……そうね」

こめかみを押さえていた手をすっと下ろし、沈痛な面持ちでつむいでいた顔をあげました。

「昔は結構ブラコンだつたわ」

「はい、いっ！？」

なんと首肯したのです。

意外、といづりいつそ衝撃的な告白です。わたしは思わず目を丸くしました。

「え、え！？ どういづことですか？ 梓ちゃん、実はライバルだつたのですか！？」

狼狽するわたしに対し、過去を幻視するためでしょうか、梓ちゃんがふつと遠い目になります。

「いい兄だつたのよ。昔はよく遊びに付き合つてくれて、勉強も教えてくれて、病気になれば母親よりも親身に看病してくれて、どんなわがまま言つても笑顔で答えてくれて、それでも私がいけないとをしたらきちゃんとたしなめてくれたわ。あんたのいう通り見た目だつていいし運動神経も人並み以上。それで頭もいいつていうんだから友達からだつて羨ましがられた。あれが私の兄なんだつて、誇らしくすらあつたわよ。胸に飛び込んで懐かずにはおられない、鼻高々と皿慢せずにほおられない、そんな理想の兄と言つてよかつたの。昔はそりや優しかったのよ。昔は……そう」

そこで梓ちゃんはわたしとぴたりと視線を合わせました。

「私が十三歳になるまではね」

全然意外な告白ではありませんでした。

「あ、なるほどーー」

それ以上の言葉はいりません。かわいさ余つて憎さ百倍。坊主憎けえりや袈裟まで憎し。そんなことわざが思い出されました。

「身内にまでそんなのだから、諦めたほうがいいわよ」

投げやりに梓ちゃんが忠告します。

その言葉には、これ以上にないほど納得できました。

梓ちゃんの先輩嫌いもただ単純な問題ではないようです。一言では語れない過去があり、その因果がいまにつながっているのでしょうか。

しかしそれで諦めるかといえば、そんなことはありません。わたしはしばらく無言でしたが、ふと語り始めました。

「わたしが先輩と初めて会ったのはですね、ふらりとひとりで道を歩いていた時です」

「……へえ」

わたしが真剣に告白しようとしているのを悟ったのでしょうか。梓ちゃんはこくりと頷きました。

「わたしはその時、とある事情でけりょっと氣分が落ち込んでいました。傷心であってもなく道を歩いていました。その道すがら泣いている女の子を見かけたのです。ぶっちゃけわたしは子供が嫌いなのでただ通りすぎようとしたしました。でもその女の子に先輩がそつと近づき優しげな笑顔で頭を撫で慰めてあげたのです。そんな優しさの溢れる先輩の行為にわたしは……」

「勘違いしないでよ！ その笑みの擬音は『ぐへへへ』とかそんなとこりひこり……」

梓ちゃんがナイスツンデレでもつともな主張をします。

なるほど確かに彼女の言う通りではあるのでしょうか。あの優しい微笑みは仮面であり、それをひつぺはがしたならば表れるのは『ぐへへ』でしょう。

しかし

「まあ、それはそれで構わないです」

「構えアホ！ 何よ。何よ何よ！ まさかそれで惚れたの？ バツカじやないの！ 大バカよ！ 下手したらあの一人よりバカよ！？」

？

「いえ、おバカの一人よりつていうのはさすがに……それに大事なのはその後です。それですね、わたしは先輩を

「うるさいつ、もう聞きたくない！」

「

これからがよことしかだとこの辺、梓ちゃんはいつも耳を
ふさごでしました。

その8 しんしん

昔のこと話をしましょ。

ある日、わたしの好きだった人は言いました。

「あんな小学生みたいなのと、付き合えるかよ」

放課後の教室に忘れ物を取りに行つた際、偶然にもそこでわたしの片恋の相手が友人數名と恋愛談議に花を咲かせているのが聞こえ、つい気になつて聞き耳を立ててしまつたのです。

そうしていたら、盗み聞きの天罰でしょうか。その言葉がわたしの片恋の口から出てきました。

「…………」

教室の扉越しでそれを聞いていたわたしは、ふいとそこを離れました。

忘れ物を取ることもなく、わたしは家に帰りました。学校から家に着くのは無意識にできて、どうやつて帰つたのかさっぱり思い出せないほどです。そのまま部屋にこもろうとして、でもじつはしているだけでは泣いてしまいそうでした。

わたしは私服に着替えて外に出ました。

行くあてもなく、ぶらりと道を歩きます。冬の空気は冷たく、吐く息は白くなり、時折吹く風は冷たく、優しくない冷気がしんしんと肌を刺すなか、歩きます。人通りもない路地道は静謐ですらあって、澄み切つた湖の底にいるかのようでした。

ただ、歩きます。途中、友達の梓ちゃんやおバカのふたりどころに行こうかとも思いましたが、きつと話していくうちに泣いてしま

うでしょう。愚痴をぶちまけても、涙は見せたくないません。それは、わたしのささやかなプライドと信念が、決して許さないことがあります。

だから、ひとりで考えます。
さむいほどにひとりぼっちで。片恋相手の彼のことを。好きだつた彼の言葉を。

彼に悪気はなかったのでしょうか。もしかしたら、からかわれての照れ隠しだつただけかもしません。わたし達は結構仲良しでしたから、それをネタにからかわれることは大いにあります。

でも、ショックでした。

もともと惚れっぽい性格のわたしです。告白してフラれたことも付き合つている相手と別れたこともあります。その度にわたしは経験を積んで、タフになつたつもりです。

ただそれでもあの言葉はわたしの恋心をざつくり傷つけるぐらいの威力はありました。心をさまして、彼をいつぺんに嫌いにさせるほど聞きたくない言葉でした。

そうしてただ歩いていた時でした。

ふと、泣き声が聞こえました。振り返ると、ランドセルを背負つた小学校の低学年とおぼしき少女がそこにいます。

いつの間にそこいたのかは知りません。ほとんど周りを見ずにつたので、気がつかなくて当たり前です。何故泣いているのか見当もつきません。ただ転んだだけかもしません。迷子なのかも知れません。もしかしたら深刻な事情があるのかもしません。

ただ。

わたしは微かにいらつとしました。自分の姿にコンプレックスのあるわたしはその合わせ鏡のような存在である子供が嫌いで、また今の気分はどん底にあるのです。そこにかん高い子供の泣き声がつきささつたら、どうなるかなんて言つまでもないでしょう。

泣けば解決するなんていう自立精神のない思考は、大嫌いです。

わたしはそのまま角を曲がってわんわんと喚く子供を見過ぎごそと

しました。

けれど、女の子に近づく人を見つけてわたしは思わず足を止めました。

その人に見覚えがあつたのです。

それはロリコンと名高い学校の先輩でした。確か梓ちゃんの兄でもあつた人です。梓ちゃんは「兄貴？ 私の家にそんなロリコンは存在しないわ」と断言し、彼を徹底的に毛嫌いしていてわたしに会わせようとはしなかつたので直接の面識はありませんでしたが、二度三度遠目で見たことはあつたので顔くらいは知っていました。

何となく陰からのぞき見をしてしまいます。笑顔で女の子の頭を撫でていたその人は、しばらくして女の子が泣きやむと笑顔で手を振り見送りました。ロリコンという噂を知らなければ、親切なお兄さんが女の子を慰めているほほえましい場面に見えたでしょう。ただ、彼の本性を知っているわたしには『ぐへへへ』という下心が透いて見えました。

くだらない。

心の底からそう思いました。

踵を返そうとして、しかし一部始終を見ていたわたしはふと閃きました。

それは悪意のある思いつきでした。少し自虐的な行動でもありました。普段なら思いつくことすらなかつたでしょうし、行動に移すようなことは万が一にもしなかつたでしょう。

でも、いまは。

「……」

わたしは曲がり角から出て、ロリコンだというその人に近づいていきます。歩いている途中に不安げな表情を作り、目前にいるその人に対して少し舌つたらずになるように意識して話しかけました。

「あの、お兄さん。道に迷ひかけたの

上田づかいでその人を見上げ、瞳を涙で潤ませることすらやつて
のけました。

からかってやれ、と思つたのです。ロリコンの男に小学生のフリ
をして近付いて勘違いさせようと思つたのです。本当に血口満足で、
理屈すらついていません。それでも、そんな手段を使ってでも、し
ょせん男なんてそんなものなんだと溜飲を下げたかったのです。
けれども、わたしの疑惑はあつさり外されました。

「道に迷つた？ 君は高校生だろ？」

その人の指摘に、えつ、と面食らいました。

「よそから来たのかい。まあそれにしてもその年で迷子とは……と
りあえず案内するか。駅はこっちだよ」

そういうてその人は歩き始めました。果然としていたわたしはあ
わててその人を追いかけます。

「な、なんでわたしが高校生だつて分かつたんですか？」

「君はどう見ても十六歳じゃないか」

ぴたりと年齢を言い止られました。

「……」

「」の人の田はどくなつていてるのでしょうか。騙そつとした罪悪感と
氣まずさから、何も言えなくなつてしましました。

わたしあつむきながら横を歩きます。その人の方から話しかけ

「見てる」ともありません。
しばらぐ、無言でそうしていました。

「どう見てもと言いますけど」

言葉を漏らしたのは、そんなおもろくない沈黙に耐えきれなかつたから、というわけではありません。
ただ、もつと別のもの耐えきれなかつたからなのでしょう。

「わたし、よく中学生に間違えられます」

むしろ高校生に見られたことがありません。ぽつりとこぼした咳きに、その人は非常にどうでもよせそつに頷きました。

「へえ」

「小学生みたいだって言われるのもしばしばです」

「そうか。僕には妹と同じ歳にしか見えないけどね。世の中には目が節穴の人も多いから、君を十三歳未満に含めてしまう人間も多いのだろう。まったく、愚かなことだ」

「はい？」

突然の演説に、目を丸くしてしまいました。

どうしたことでしょう。この人、小学生といつ単語を出したとたんペラペラと口数が増しましたのです。

「大体ね、世の中の多くの人間は間違っているよ。人間を判断する基準は見た目じゃない。美人だからなんだというんだい？歳をとれば、みな変わらない。だからと言つて中身で判断するのもまた違う。性格なんて、いくらでも歪んでしまうものじやないか。清く正しい人間なんて、ただの世間知らずだ。ならば人間の絶対変わらな

いものとはなんだい。絶対的な基準となるものはなんだ。人と人の関係の中にはあって、それに流されないものとはなんだい？ そう。生きてきた年数、つまりは年齢だ。人間は、女を判断するのは年齢なんだよ

意味不明な論法を使い、堂々と最低なことを言いきっています。

「……は」

ロリ「ンと言つのは噂にたがわないよつです。さりげなく相談してみようか、愚痴をぶつけてやろうかと思つていたのですが、そんな気も失せました。ただその代わり

「は、あはつ」

お腹の底から、笑いが湧きあがつてきました。

「あははつ、あはははは！」

道端で立ち止まり、お腹を抱えて笑つてしましました。先導していた彼もいぶかしげな顔で振り向きます。

「どうしたんだい？」
「いえもひおかしくつて！」

笑い過ぎてちょつと涙が出てきました。田元をこすつてそれを拭きとります。

ああ。

ほんとうに、変な人です。

人の価値とは何か。そんなことを語らうるとは思いもしませんでした。

人の関係の中で絶対に変わらないもの。そんなもの、おそらくは血縁関係ぐらいなものでしょう。時がたつごとに知り合いも友達も、そして当然恋人だって常に絶え間ない変化に襲われてしまいます。そしてわたしは、そんな悲しくも楽しい変化にこそ価値があると思っています。

ただ、それでも、見た目なんていうわかりやすいものにとらわれず、内面などという流動的なものにも目をくれず、それでも人と人との間に変わらないものを見つけようとする私のロマンチックな思考が、なんだかもうどうしようもないくらい

「ほんとうに、面白くって」

笑ってしまいました。

「そうかい」

「ええ」

外面を重視して、内面で判断するような、根っからのリアリストのわたしには、ちょっと眩しい思考です。

わたしは最後にくすりと笑って、カミングアウトをすることにしました。

「梓ちゃんはわたしなんかよりもっと大人っぽいですよ。スタイルもいいですし、お化粧も上手です。服選びのセンスも素敵ですね」

何より自分を磨くことに手を抜かない彼女を、わたしは尊敬しています。

「……ん? 妹を知つていいのかい?」

「梓ちゃんとは中学からの友達ですかから」

「じゃあ同じ高校?」

「はい。あなたの後輩になります」

「へえ」

やつぱり興味なさげに頷く那人、いえ、先輩にわたしは立ち止まりました。

「ありがとう」やつました

頭を下ります。お礼と、何より謝罪の意を込めて、深々と。

「い」までくればもう道は分かれます

「じゃあ気をつけ」

「はい、先輩」

手を振ると、先輩はあつさり立ち去つて行きました。高校生にもなつた地元の人間が、ここらで道に迷つといつありえない矛盾に気がついていないわけでもないでしょ? そこをつぶくることもありませんでした。

本気でわたしのことに一欠片も興味がないのでしょうか。先ほどの女の子に見せたような笑顔は欠片もありません。

それでも。

わたしはそつと自分の胸に手を当つました。

ああ、こりないな。

とくんとくん脈打つその鼓動に、我ながら苦笑しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6010z/>

ロリコン・コンプレックス！

2011年12月27日22時55分発行